

遺された／生きる者にとっての、墓

牧畜民ヒンバの事例から

Graves and the Art of Living :
a Case Study of the Himba, Pastoral People in Namibia

吉村郊子

YOSHIMURA Satoko

はじめに

①牧畜民ヒンバのくらしと墓

②埋葬のようす

③埋葬の場所

④墓参りと通過儀礼にみる、生きる者たちの成長

⑤考察

おわりに

【論文要旨】

人が亡くなったときにその遺体をどうするのかについては、さまざまな慣習がみられる。すなわち、遺体を埋葬するのか否か、埋葬する場合にはそれをどのような手順でおこない、そこに墓石や墓碑などを置くのかといった、埋葬方法や墓の装飾様式などは、地域や集団によって、また時代によってもさまざまなかたちをみせる。本稿では、ヒンバなどの事例を参照しつつ、墓と、遺された／生きる者たちの営みとのかかわりについて考察する。

ヒンバは南部アフリカにくらす牧畜民であり、他のさまざまな集団とのかかわりや植民地統治(委任統治)の影響を受けつつ、それぞれの時代の状況に応じて大小の範囲を移動し、家畜を連れて遊動生活をおくってきた。そうしたなかで、彼らは遺体を埋葬する習慣をもち、そこに墓石などを置いて埋葬場所を明示する。さらに近年では、死者の年齢や性別によっては氏名や生没年の他、ウシや銃などさまざまなモチーフを刻んだ墓碑を築く事例も少なくない。

本稿ではそうした墓の様式の実態と変化を概観し、さらには、どこに墓を築くかという遺体の埋葬場所の選択や、実際の埋葬(式)のようす、墓参りとそれに連動しておこなわれる通過儀礼などに着目して、おもに生きている者の側の観点から墓をめぐる人びとの実践について検討し、考察をおこなった。

その結果、第一に、墓の場所の選択は、埋葬された死者のみならず遺された／生きる者にとっても重要な意味をもち、そこには、死者の社会的な地位や権力を誇示しつつ、それらを手がかりとして生きる者たちが土地とのつながりを示し、社会的・政治的な力と権利を表現しうる側面があることを明らかにした。第二に、葬礼や2～3年に一度おこなわれる墓参りは、さまざまな通過儀礼と連動しつつ、墓に埋葬された故人(祖先)と生きている者たちとのつながりを確認し、明示化する機会となっていることを示した。その過程をとおして、親しい者の死を受け入れて、それを個人や集団の成長へとつなげていこうという人びとの実践の様態を明らかにした。

【キーワード】墓、墓参り、儀礼、ヒンバ、牧畜民

はじめに

人が亡くなったときにその遺体をどうするのか、すなわち埋葬するのか否か、埋葬する場合にはそれをどのような手順でおこない、そこに墓石や墓碑を置くかどうかといったように、遺体の処置や埋葬方法と墓の装飾様式などについては、地域や集団によって、さらには時代によってもさまざまなかたちをみせる。本稿では、ヒンバなどの事例から、墓と遺された／生きる者たちの営みとのかかわりについて検討し、考察する。

ヒンバは南部アフリカに暮らす牧畜民である。ヒンバの移動・遊動域の大小は、彼らと他のさまざまな集団とのかかわりや植民地統治（委任統治）の歴史のなかで大きく変化してきた。今日、彼らは拠点となる家屋敷を中心とした村の領域を基本として、そこで家畜を連れて遊動生活を送っている〔吉村 2008〕。そうした移動・遊動生活を送るなかで、彼らは一定の様式に沿って遺体を埋葬する習慣をもち、そのうえに石や木の枝を置いて埋葬場所（墓）を明示してきた。さらに近年では、死者の氏名と生没年やさまざまな絵柄などを組みこんだ墓碑を築くことも少なくない。また、一般に遺体は亡くなった場所の近くに埋葬されることが多いが、ときには人と土地とのかかわりや社会的・政治的な意味づけのなかで、個別に埋葬場所が選ばれることもある。

ヒンバの墓については、1990 年代にナミビア北西部で調査したボーリッヒの論考がある〔Bollig 1997〕。彼はヒンバの埋葬様式とその変化に着目して、19 世紀後半以降、ヒンバの墓が権力構造の表現の舞台となってきたことを指摘した。また、そうしたなかで社会的な地位を含めた富や性、民族的な由来の違いによって、埋葬様式に違いがでてきたと述べている。

さらには、当時、彼が調査をおこなっていたヒンバの村はナミビアとアンゴラの国境近くにあり、そこでは水力発電用のダムを建設する計画がもちあがっていた。そうした開発計画に対する現地の住民ヒンバの抵抗という観点から、ヒンバの人びとが祖先の墓をとおして土地との関係性を表現しようとする、また、宗教的な信念や儀礼を実践するうえでも彼らにとって墓が重要であることを指摘した〔Bollig 同〕。

筆者もまた別稿で、ヒンバの人びとが近年、どのようにして自身の暮らす土地に対してつよいなわばり意識（「われわれの土地」という意識）を抱くにいたったかについて、その経緯と実態を示し、その理由をかつての南アフリカ（南アフリカ連邦／南アフリカ共和国⁽²⁾）による委任統治政策との関連から明らかにした〔吉村 2004, 2008〕。これらの論文のなかでは、複数の土地に点在する祖先の墓や彼らのライフヒストリーからある親族集団の移住史を再構成し、墓が、遺された者たちの家屋敷の再建や土地・水場などの資源利用をめぐる争いにおいて具体的にどのような役割を果たし、今を生きる人と土地とをつないでいたかを示した。

さらに他集団へと視野を広げてみると、ほかにも、墓を取りあげた優れた民族誌がある。たとえば、森山はマダガスカルにくらすシハナカについて、墓をめぐる人びとのさまざまな実践という側面から考察している。そこでは、シハナカの人びとが自身の埋葬場所（墓）をどのように選択していくのかが示されている。また、同氏は、埋葬様式の変化とそれにとまなう儀礼の変化などを取りあげて、埋葬された人が抽象的な祖先ではなく個別性をもった死者へと変化しつつあることを指摘

した〔森山 1996〕。森山が調査したシハナカのように、ときに人びとは生前に自らの埋葬場所を選んで指定し、あるいは自身で用意することがある。

ヒンバの場合もまた、ある人がある意図をもって、通常の場合とは異なるところに埋葬されることを望み、生前にそのように家族に指示していた事例があった。あるいは遺族たちが選んで、通常とは異なる場所に故人を埋葬した事例もあった。そうした墓をめぐるさまざまな実践は、墓に埋葬された当事者にとってのみならず、遺された／生きる者にとっても重要な意味をもつ。

どのような墓をどこにつくり、そして、どのような手順で葬礼や墓参りなどの儀礼をおこなっていかについては、一般には慣習や規範に沿って進められて、ある程度は決まりうる部分もあるが、一方では、それらは決して単に慣習や規範に沿ってただ機械的・形式的に進められるだけのものでもない。それらの実践をとおして、人びとは、ある個人の死を徐々に理解して受容し、さらにはそこに解釈を与えつつ、生きている側の個人や集団をも成長させて再編していく。筆者が着目したいのはこの点であり、すなわち、わたしたち人間が人の死をどのように受け入れて解釈し、そこに遺された／生きる者の^{せい}生を紡いでいくか、という点にある。

そうした理解と考察へのステップのひとつとして、本稿では、まず墓に焦点をあてて、墓と生きる者の営みとのかかわりについて考えてみたい。以下では、まず1章において、ヒンバのくらしと墓の概要、およびその変化について述べる。つづく2、3章では、実際に遺体が埋葬される際のようなすや埋葬の場所について、4章では、墓参りのようすと、そうした墓参りなどにもなっておこなわれるいくつかの通過儀礼について述べる。そして、5章において、遺された／生きる者の営みと墓とのかかわりについて、考察を加えたい。

なお、本稿では、1994年から1998年にかけてカオコランドなどナミビアでおこなった現地調査で得た一次資料と、先行研究やその他の文書を含めた二次資料を用いて、論じていく。

①……………牧畜民ヒンバのくらしと墓

ヒンバはバントゥ系の牧畜民であり、ナミビアの北西部とアンゴラの一部にわたる約3万平方キロメートルの地域に、7千人から1万1千人がくらししている〔Malan 1973, Crandall 1992〕。彼らの居住域のうちナミビア側の地域はカオコランド⁽³⁾（Kaokoland）と呼ばれており、クネネ州（Kunene Region）の一部となっている（図1）。

カオコランドには約2万6千人がくらししており、その9割以上がヘレロ語を母語とする人びとであり、すなわちヘレロとヒンバであった。ヘレロの男性はシャツやズボン、つなぎなどの洋服を着用し、女性は西洋風のロングドレスを纏うといったように、ヘレロが洋装化しているのに対して、ヒンバは男女ともに腰に革や布などを纏い、上半身は裸である場合が多く、身体の各所には鉄ビーズやガラスビーズ、皮を用いたさまざまな装飾品を身につけている。このようにヘレロとヒンバの外見は大きく異なるが、彼らは同じ言語を話し、文化的・社会的な類似点を多くもちあわせてもいる〔Malan 1974, 太田 1996, 2001〕。ヘレロとヒンバは共通の祖先に由来し、古くはともにヘレロと呼ばれていたが、19世紀半ばから20世紀はじめにかけて、他集団とのさまざまなかかわりの歴史のなかでその外見的な違いが顕著になり、さらには現在のように異なる名称の集団へと分かれて

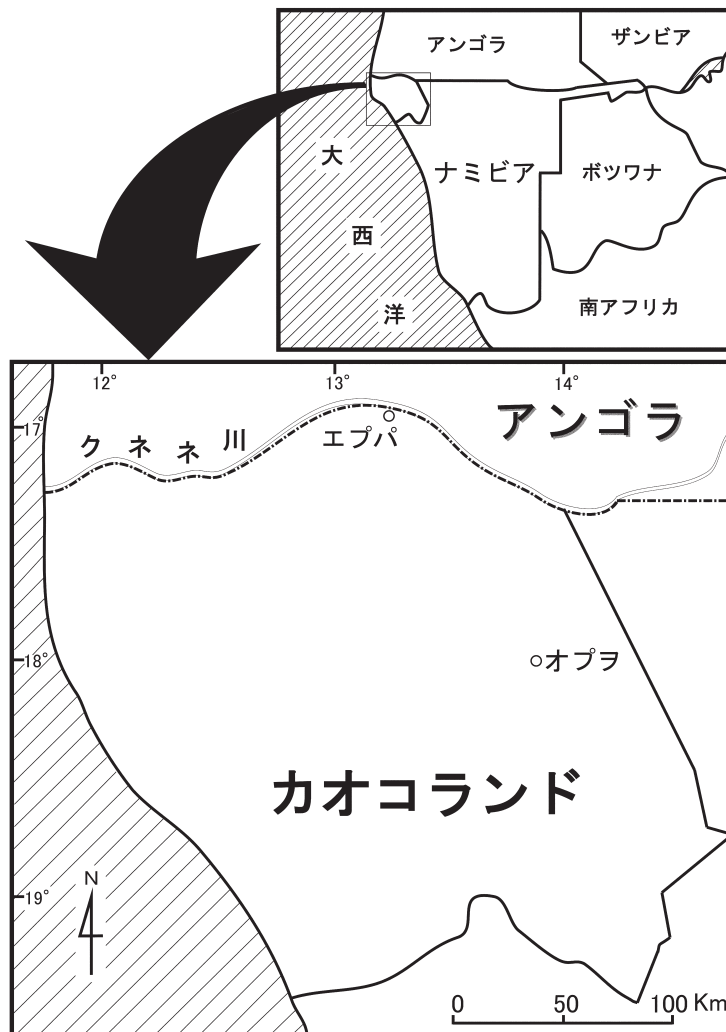


図1 ナミビア北西部のカオコランド

いった〔吉村 2008〕。

今日、カオコランドにくらすヘレロとヒンバの多くは、ウシ・ヤギ・ヒツジの牧畜によって生計をたてている。彼らは、拠点となる家屋敷「オンガンダ」〔onganda, pl. ozonganda〕をもちつつ、季節や必要な自然資源の状態に応じて遊動している。彼らは、11月から2～3月ごろまでの雨季のあいだを家屋敷で過ごし、やがて乾季になると別の放牧地や水場を求めて家畜キャンプ「オハンボ」〔ohambo, pl. ozohambo〕へと移動する。そうして、放牧地や水場の状態に応じて家畜キャンプを転々とさせながら、また雨が降りはじめるところには家屋敷に戻るといった遊動生活をくり返している。

この章では、先行研究や筆者自身の調査による事例などから、ヘレロとヒンバの墓について、おもに埋葬様式や墓石・墓碑の変化などを概観しておきたい。

カオコランドにおけるヒンバの墓は、1940年代ごろを境に埋葬様式が大きく変わったとボーリッヒは述べている。彼によれば、1940年代以前には遺体は家畜の皮や毛布に包まれて屈葬されていたものが、その後、伸展葬へと変わり、毛布や棺を用いて埋葬されるようになったという。また、

そうした埋葬様式の変化とともに、墓の地表面に置かれるものも変わっていった。1940年代以前は、埋葬場所には三つあるいは四つの石「オゾンドongo」〔ozondongo〕が15～40センチメートルほどの高さにたてられるか、あるいは、数個の白っぽい石英の石が黒や暗褐色の石とともにたてられていた。また、ときには木の枝でおおわれただけのような墓もあった。それが1940～50年代以降は伸展葬へと変わり、埋葬された場所に沿って地表面にたくさんの石を四角いかたちに積みあげるようになった。さらに近年では、頭の部分に墓碑をたてるようになった。なお、ボーリッヒは、1938年にオブラの町に最初の行政府がおかれて、そこでカオコランドの人びとが白人に接触する機会が増えたと記している〔Bollig 1997〕。そうしたことが、埋葬様式の変化に何らかの影響を与えたと考えられる。

なお、ヘレロの一部は、ナミビア北西部のカオコランドのほかに、ナミビア中央部や現在ではボツワナにもくらしている。ナミビア中央部にくらしていたヘレロが、19世紀半ばごろからすでにヨーロッパ系の宣教師や移民たちと接触していたのに対して〔Vedder 1966〕、カオコランドにくらすヘレロやヒンバに話をきくと、彼らやその祖先たちがヨーロッパ系の人びとに接触する機会を得たのは19世紀末～20世紀はじめ以降のことであり、さらにそうした文化や様式に触れる機会が増えていったのは、20世紀はじめ～20世紀半ば以降のことかと推察される。

今日、カオコランドには世界中のさまざまな国から観光客が訪れている。また、オブラの町にはヨーロッパ系の移民やその子孫たちが若干くらしている。オブラにはローマ・カトリック教会があり、町にくらす人びとのなかには日曜日に教会を訪れる者もいたし、町から離れた村に暮らすヒンバのもとにもまた、キリスト教の他宗派などによる布教活動がなされることがあった。そうしたなかで自然と覚えたであろう讃美歌を、村の子どもたちや女性たちが何気なく口ずさむ姿を目にすることもあった。

カオコランドのヒンバの村において、実際に教会に通う人やキリスト教に改宗した人は決して多くはなかった。しかし、そうした信仰とは別に物質的な面においては、ヒンバもまたヨーロッパ系の移民やその子孫たちから断続的に影響を受けており、そのようすを彼らのくらしのなかに垣間みることができた。埋葬様式もまたそのひとつであり、棺のかたちやデザインなどに加えて、墓碑に刻まれる文字やモチーフなどにもそうした影響をみてとることができる。

筆者は、ナミビア北西部のカオコランドで調査していたときに、ヒンバやヘレロの葬礼や墓参りに参列する機会があった。また、ナミビア中部においては、ヘレロの居住域やヘレロの墓地（今日、歴史的な遺跡のひとつにもなっている場所）を訪れて、そこで特徴的な墓の様式を目にした。それらについては、3章以降で触れる。そのまえに次の2章では、実際にどのようにして遺体が埋葬されていたかを示す。

②……………埋葬のようす

ここでは、1997年に亡くなったひとりのヒンバ男性の事例から、彼の死後、その遺体がどのように棺に納められて埋葬されたのか、そのようすを追っていく。

この年長男性は乾季も終わろうとした10月の夜に病死した。その訃報は、数人の使者によって

翌朝までのあいだに、各地にいる親族たちへと伝えられた。翌朝、男性の親族たちは町から棺を取り寄せて、そのなかに男性の遺体を納めた。そして、昼前から埋葬の準備がはじめられたが、そのころになるとすでに近隣および遠方からやってきた人たちをも含めて、多くの人びとが故人の家屋敷やその近くに集まってきていた。

先の 1 章で概観したように、ヒンバは、かつては遺体をウシやヤギの皮でくるんでから屈葬していたが、その後これは伸展葬に変わった。そして、現在では棺が用いられることが多い。このとき遺体は毛布にくるまれて、年長の男性であればさらにウシの皮に包まれて、棺に納められる。

棺については、オブワなどの町で入手することができる。たとえばオブワでは、アンゴラ由来の異なる言語集団の人びとが掘った、手づくりの木製の棺が売られていた。さらに離れた大きな町に行けば、一定の規格で製品化されたような木製の棺も入手することができた。この章でとりあげた男性の事例では、オブワで入手した棺が用いられた。それは白色の棺で、部分的に淡い桃色のペンキで彩色が施されており、両脇には複数の金具がついていた。

一般に、遺体を埋葬する場所は家屋敷から少し離れた林のなかであることが多い。そこには新旧さまざまな墓が並んでいる。上述の年長男性の事例では、彼の家屋敷から少し離れた林のなかで木々も疎らな辺りに、彼らの親族の墓が並んでいた(本稿では、以後、こうした場所を「墓地」と呼ぶことにする)。この男性の遺体は、朝、家屋敷で棺に納められた後、11 時ごろに墓地の



写真1 埋葬に集まってきた女性たち。木陰で休んでいる。

近くへと運ばれた。当日、家屋敷や墓地の近くには朝から多くの男女が集まってきた。大きな木の下には、多くのヒンバやヘレロの女性が集まって腰をおろしていた(写真 1)。そこへ新たな車や人がやってくるたびに、女たちは、「トゥルルルルルルル……」という音(「オンドロ」[ondoro])を口でならして、新たな参列者たちを迎えていた。そうして参列者の数は徐々に増えていった。

このとき、遺体を納めた棺は女性たちとともに木陰にしばらく置かれていた。一方、男たちのうち年長の者は、女たちの輪から少し離れて、数人ずつで小さな木陰に腰をおろしていた。また、そこから西に数十メートル離れた墓地には、若者や中年の男たちが集まって、墓穴を掘りはじめていた。

このときカオコランドは乾季の終わりごろで、土は硬く乾燥しており、また地中には石がたくさんあって、穴掘りはなかなか思うように進まなかった。若者を中心に 30 人ほどの男たちが炎天下、穴のまわりに群がっていた。そして、ある者たちは交代々々につるはしで石ころまじりの地面を掘りすすめては、スコップで土をかき出すという作業をいく度もくり返していた。ほかの者たちは周りでたばこを吸いながら、大声をあげて掘り手たちをひやかし、歓声をあげていた。あるいはただ

黙って地面に座り、そのようすを眺めている者もいた（写真2）。人びとは酒をのみながら穴を掘り進めていき、その足元には空になった酒瓶がいくつも転がり、さらには新しい瓶が掘り手や見物人たちの手から手へと渡っていた。

一方、大木の木陰にすわっている女たちの数はさらにふくれあがっていた。彼女たちは車が入ってくるたびに、「トゥルルルルルル…」と口をならし、やはり酒をまわし飲みながらおしゃべりに興じていた。ときおり2〜3人ずつが立ちあがって水場に出かけては水を飲み、あるいは水を汲んできてほかの者たちの乾いた喉を潤していた。また、女たちから少し離れたところにある小さな木陰には、年老いた男たちが静かに座って墓地のほうをみつめていた。

そうして人びとは4時間近くかけて墓穴を掘り終えた。穴は120センチメートルくらいの深さで、棺が納まるように楕円状のかたちに大きく掘られていた。そして、15時40分ごろ、数人の男たちが木陰から棺を肩にかついで、墓地へと運んでいった。棺をかついだ男たちは、そのまま墓穴の周囲をぐるぐるとまわり、走りはじめた。その横では、別の男たちが列をくんで死者をたたえる唄を叫び、握りしめた杖の先を天にかかげながら、「戦いのダンス」を踊っていた（写真3）。

一方、このとき女たちは、すすり泣きながら墓地のほうへと近づいてきて、やがて地面に腰をおろしてさらに泣きつづけた。そうして参列者がそろそろと、棺は群衆へと突進していった。そうしてときおり担ぐ人をかえつつ、棺は人びとの輪から輪へと、輪に沿ってまわり練り歩く



写真2 墓地で、墓穴を掘る男性たち（上）。そうした掘り手を取り囲む男性たちの後ろには、たくさんの石を積み重ねたような、古い墓がみえる（下）。



写真3 埋葬の際、棺は数人の男性たちによって担ぎだされて、墓穴のまわりや参列者のあいだを走りまわる（写真左）。その他の男性たちは、死者をたたえる唄を叫び、戦いのダンスを踊っている（写真中央）。

ように走った。側にいたヒンバがいうには、これは、「棺（のなかの死者）がみんなにあいさつをしているのだ」という。そして、参列者のなかにもしも棺のなかの男性を呪い殺した者がいたならば、棺はカタカタと音をさせて、その者を指し示すと考えられている。したがって、近親者のうち埋葬に立ち会わない者がいた場合には、その者が死者を呪い殺したのではないかと解釈されて、周囲から疑いをかけられることがある。

やがて棺は群衆の輪から離れて墓穴の前に戻り、そこで静止した。そして、「なにが欲しいのか?」、「だれに呪われたのか?」と、ひとりの年長男性が棺に問いかけた。それに対して棺やその蓋がある動きを示すことで、死者は問いにこたえと考えられているが、このときはそうした“こたえ”もないままに、15時48分、棺は地面におろされた。そして、頭を西に足を東に向けて、穴のなかに横たえられた。男性たちは棺のうえに木の枝を数本おき、さらに土をかぶせていった。そうして棺が地中におさめられた後、その地表にはやわらかな土が盛りあがっていた。棺の頭の部分にあたるところには、30～40センチメートル四方の大きく平たい石が数個ほど置かれた。このようにして埋葬が終わった後、人びとは家屋敷に戻って葬礼をはじめた。

一般に、亡くなったのが年長男性であった場合には、葬礼は1～2ヵ月以上に渡ってつづけられる。その間に（あるいは次の墓参りまでのあいだに）人びとは墓石や墓碑を用意して、遺体を埋葬した場所に設置する。墓碑には、ウシや銃などさまざまなモチーフの絵とともに、故人の氏名や生年／没年などが記される。また、年長男性の葬礼ではウシを屠るごとに、その角を墓の頭の部分やその近くの木の上に積み重ねて、墓を装飾する。そうして墓の様式が整えられて葬礼が終わるころ、遣された人びとは徐々に日常へと戻っていく。そして、喪明けの儀礼でもある次の墓参りをおこなうまでのあいだは、人びとが林のなかの墓地を訪れることはあまりない。やがて墓はひっそりと林のなかに溶けこんで、周りの風景になじんでいく。

このように今日、一般に、遺体は家屋敷の近くの林や川辺にある墓地に埋葬されることが多い。そのほかに死者の年齢や性別、生前の希望（遺言）などによって、あるいは遺族やさらに後年の人びとの“判断”によって、別の場所に埋葬されたり、いったん埋葬された遺体や墓を後に移動したりすることもある。次の3章では、こうした埋葬の場所について述べる。

③……………埋葬の場所

かつて、ヒンバはさまざまな理由で広い範囲を移動していた。たとえば、ほかの集団によるレイディングから逃れるために、あるいはレイディングや早魃によって家畜を失った人びとが食糧や新たな居住地を求めて、遠く離れた親族や友人を訪ねて、カオコランドの広い範囲を移動していたし、なかにはアンゴラ南部へと移動した人びともいた〔吉村2008〕。

もちろん、移動した先で人が亡くなることも少なくはなかったであろう。その場合、遺体は亡くなった場所の近くの林のなかや川辺に埋葬されることが多かったようである。また、稀なケースではあるが、いったんそうして埋葬された後、しばらく経ってから、ある意図をもって移動された遺体や墓もある。したがって、ひとつの親族集団（リネージ）の祖先の墓は、彼らの現在の居住域の近くにまとってみられることが多いが、そこから数十キロメートルからときには100キロメートル

ル以上離れた遠い場所に点在するものもあった。そして、家屋敷の近くにあるような墓群(墓地)と、さらに離れた場所に点在する複数の墓をも含めて、ヒンバの人びとは父系リネージを中心とした集団ごとに2〜3年に一度くらいのわりあい墓参りをおこなう。

さて、20世紀はじめごろから1990年の独立まで、ナミビア(かつて南西アフリカと呼ばれていた地域)は南アフリカによる委任統治を受けていた。その統治政策のなかで、ヒンバの移動もまた制限されるようになり、さらには家畜を連れた遊動範囲も小さくなっていった[吉村2008]。

また、近年では道路の整備が進み、車で遺体や棺を運ぶことも可能になった。たとえば、今日、ヒンバの人びとは病気やケガの治療を受けるために、西洋医がいる病院や他の言語集団(アンゴラなどに分布する集団)の呪医のもとを訪れるべく、オプワの町やさらには遠くの大きな町まで出向くことがある。そうした治療の過程で、彼らが家屋敷から遠く離れた場所で亡くなった場合にも、そのなき骸を車で家屋敷まで運び、そこで埋葬の準備をして葬礼をおこなうことも可能になった。

1997年、カオコランド中部の村にいらしていたヒンバの男性(1908年生まれ)は、病気の治療のために、まず家屋敷から80数キロメートル離れたオプワの町の病院へと運ばれた。その後、さらにカオコランドの東に隣接するオヴァンボの居住域にある別の町まで運ばれて、そこで手術を受けた。それは、オプワから西に約230キロメートル離れたオシャカティ(Oshakati)という町であった。そうして西洋医学の治療を施された後、男性は伝統的な呪医による診断と治療をも受けたが、その病状は改善しなかった。そして、いよいよ最期を迎えようというとき、男性は家屋敷に戻ることを望み、車の荷台に身体を横たえて村へと向かった。そうして運ばれる途中に、川辺の小さな道沿いの林で彼は息をひきとった。

このとき、人びとはまず近くの木々を伐採して、その場で枝木をドーム型に組んで簡易な仮小屋をつくり、そこに毛布等をかぶせて遺体を安置した(写真4)。その後、親族が棺を探すべく町へと向かったが、その棺の調達のためにさらに日数を要したために、人びとは、男性の遺体をいったんオプワの町に戻し、空冷設備のある場所(霊安室)に安置した。そして、棺を入手した後、あらためて男性の遺体を車で村へと運び、そこで埋葬および葬礼がおこなわれた。

ほかにも、ケガをしたヒンバの男性がオプワまで運ばれて、そこで息をひきとった事例や、女性がウィントフック(ナミビアの首都:オプワから約700キロメートル)で病気の治療・手術を受けた後に亡くなった事例でも、やはり人びとは移動手段を探し、車で遺体を引きとりに向かい、カオコランドの村にある家屋敷まで連れて帰ってから葬礼をおこない、埋葬していた。

このように、近年では、道路の整備が進んで車の利用も可能となり、さらに町



写真4 男性が息をひきとった場所

その際、枝木をドーム型に組んで、ここに遺体を一時的に安置した(写真中央〜左)。このように人が道沿いの林などで亡くなった場合、ヒンバは徒歩でそこを通るときに、死者のために小石をひとつずつ積みあげていく(写真右下:木の根元に円錐状に小石が積みあげられている)。

の病院などには空冷設備が整ったところもあるので、仮に遠く離れた場所で治療を受けてそこで亡くなったとしても、遺体を村の家屋敷まで運ぶことができるようになった。もちろん、先の2章でみた男性の事例などのように、病気や事故などによって、家屋敷やその近くで亡くなる場合もある。

いずれの場所で亡くなったにせよ、今日、遺体の多くは、2章でみたように家屋敷の近くにある墓地に埋葬されることが多い。ここでは、そうした一般的なケース以外に、どのような場所にどのような人びとが埋葬されていたのかを示す。

家屋敷のなか

遺体の多くは家屋敷からやや離れた川辺や林のなかに埋葬されるが、まれに家屋敷のなかに遺体が埋葬されることもある。そのひとつは、乳幼児が亡くなった場合である。この場合の“乳幼児”とは、“生まれた後、牧童としてはたらきはじめるくらいまでの年齢の子どもたち”を指す。これは、それぞれの生育環境や発育のようすにもよるが、ヒンバの村においては、だいたい5～6歳ないし7～8歳くらいまでの年齢で、頭髪を剃っている（まだ髪を伸ばしはじめていない）子どもたちを指すと考えてよいだろう。そうした幼い子どもは、マラリアなどの病気や水などの事故で亡くなることもあり、その場合、遺体は毛布などにくるまれて（棺を用いずに）家畜囲いのなかに埋葬されていた。

家畜囲いは家屋敷の中心にあり、周りを木の柵で囲まれている。ここは放牧から帰ってきたウシを入れておく空間であり、また、搾乳がおこなわれる場所でもある。そうした搾乳や放牧群の管理のために必要なときを除けば、家畜囲いのなかで人が日常を過ごすことはない。すなわち、家畜囲いは、家屋敷という人の居住空間の内側に設置されているが、そのなかでも家畜（ウシ）のための空間といった要素がつよい場所でもある。

もうひとつは、そうした家畜囲いと女性（妻たち）の小屋のあいだの、まさに人びとの日常の生活空間ともいえるところに遺体を埋葬する場合である。そうした事例は、死者全体の数に比べれば決して多くはない。それでも、筆者はそうのように埋葬された墓を複数、見聞きした。それらはすべて年長男性の墓であり、墓の主が家屋敷のなかに埋葬されることを望み、生前にそのような希望を親族に伝えていた。そして、男性が亡くなった後、その願いに沿って、親族たちは遺体を家屋敷のなかに埋葬し、墓を築いていた。

そのひとつとして、筆者が別稿〔吉村2002, 2004〕で紹介した事例では、棺に納められた遺体が家屋敷のなかに埋葬されて、その頭の部分には墓碑が置かれ、また木までもが移植されて生い茂っていた（写真5）。それは、ひと目で“墓”とわかるようなものであった。しかし、近隣で確認できた同様の事例の墓のなかには古いものもあり、一見してそれが墓であるとはわからないようなものもあった。そうした事例においても、遺体が埋



写真5 家屋敷のなかの墓(写真中央)
その右奥に見える木の柵は、家畜囲いである。

葬されたところの地表には小さな石がいくつか置かれていたが、その地表は長い年月をかけて家畜などによって踏みかためられてもいたので、ふつうの墓地にあるような古い墓とは様相が異なり、すっかり人びとの日常のくらしのなかに溶け込んでいた。

家屋敷やその近くの墓地から離れた場所(オブワなど)

かつて、さまざまな理由でヒンバが広い範囲を移動しつつくらししていたころ、彼らの移動手段は徒歩か、よくてもロバや馬などによるものであった。そうしたときに人が亡くなった場合には、それが家屋敷から遠く離れた場所であっても、その場ですぐに埋葬されることが多かった。

たとえば、あるヒンバの男性は1958年に、カオコランド中部からアンゴラへと親族をたずねて移動している途中に亡くなった。その際、男性の遺体は、彼が亡くなったクネネ川沿いの林に埋葬された。その場所は、彼らの家屋敷から直線距離にして100キロメートルほど離れており、もしも道路に沿って進むとすれば、少なくとも200キロメートルくらいの距離を移動しなければならなかった。また、別の親族集団の墓を調べてみると、彼らの家屋敷の近くにある墓群(墓地)に加えて、そこから十数～数十キロメートル離れた各地に祖先の古い墓が多数、点在していた。それらは、先述のとおり移動手段が限られていて、さらには遺体を一時的に安置しておくような空冷設備も近くにはなかったころの墓である。

そのような古い墓の事例とは別に、移動手段や空冷設備などが整備された今日においても、亡くなった場所や家屋敷の近くの墓地に遺体を埋葬するのではなく、ほかの場所に埋葬し、そこに墓を築いていた事例があった。以下に、そうしたふたつの事例を示す。

ひとつは、1995年に病死したヒンバの男性の事例である。このとき葬礼は、家屋敷があったカオコランド中東部の村のみならず、オブワの町でも盛大におこなわれた。オブワでおこなわれた葬礼には多数の人びとが集まり、参列者のなかには、カオコランドのヘレロやヒンバのみならず、遠くナミビア中部や首都ウィントフックなどからやってきたヘレロも含まれていた(写真6)。その後、故人は、オブワの町の家並みから少し外れた小高い丘に埋葬された。そして、1997年9月には、その親族である男性が首都ウィントフックまで出向き、石の調達・加工や墓碑の設置について、ウィントフックにくらすひとりのヘレロの男性に相談しながら準備を進めていた。そして、同年10月上旬に、ウィントフックからオブワへと

墓碑が運ばれた。墓碑には黒い御影石のような立派な石が用いられていて、そこには故人の氏名や生年と没年に加えて、銃とウシのモチーフが描かれているということであった。ただし、墓碑は袋で覆われていて、実際にそのようすを目にすることはできなかった。このように、ヒンバの人びとは埋葬して墓碑を据えた後も、喪明けの儀礼(次の墓参り)がおこなわれるまでは、墓碑が人目にふれない



写真6 オブワでの葬礼に集まってきた、ヘレロやヒンバたち

ようにしておく。

ここでは、そのヒンバの男性の墓碑をウイントフックからオプヲの町まで運んできた人物について、着目しておきたい。その人物とは、首都ウイントフックにオフィスをおく NMC (National Monuments Council: 当時、ナミビア国内の遺跡の保護・保全をおこなっていた機関) の長を務める男性であった。彼はウイントフックにくらす若いヘレロであり、その出身地(両親や親族たちがくらす場所)もまた、ナミビア中西部であった。たしかに、ヒンバの人びとが遺体を村以外の場所に埋葬し、墓を設置しようとするならば、その際には政府の関係機関に相談し、理解や許可を得る必要がある。そのために、亡くなったヒンバの男性の親族はウイントフックの NMC で相談し、そこで働くヘレロ男性がカオコランドのヒンバに協力して墓碑の運搬や設置を助けたということであった。

もうひとつは、1997年に亡くなったカオコランドのヘレロの男性の事例である。この男性もまた、自身や親族の家屋敷があった村ではなく、そこから離れたオプヲの郊外に埋葬された。ここで着目しておきたいのは、男性の墓が“ヴィタ・トム”(1937年ごろに亡くなったヘレロの男性)の墓のすぐ側に設置されたということである。1997年に亡くなった男性はカオコランド中東部にある村のヘッドマンの弟であり、その兄弟はヴィタ・トムの直系子孫とされる別のヘッドマンと系譜的に近い関係にあった。すなわち、この兄弟自身もまた、ヴィタ・トムと系譜的な繋がりをたどることができると推察される⁽⁴⁾。

ヴィタ・トムは、1916~17年ごろから1937年ごろにカオコランドにくらしていたヘレロの男性である。この人物の詳細や、彼の墓の側に、20世紀末に亡くなったひとりのヘレロ男性を埋葬することがどのような意味をもちうるのかについては、後の5章で触れる。

④……………墓参りと通過儀礼にみる、生きる者たちの成長

2章でみたように、ヒンバの人びとは一般に、まず遺体を埋葬してから葬礼をはじめる。葬礼は、故人の年齢や性別にもよるが、1ヵ月から長ければ2ヵ月以上にわたってさまざまな儀礼をまじえながらつづけられる。たとえば、集団のリーダーであった男性が亡くなった場合には、その集団(実際には、彼やその息子たちの家屋敷)の火を新たにつけなおす儀礼などもおこなわれる。新たに熾された火は、家屋敷のなかにある「オクルウォ」⁽⁵⁾ [okuruwo] にもち帰られて儀礼に用いられるほか、そこから各小屋へと分けられて、日常の煮炊きなどにも使用される。オクルウォとは、儀礼で祖先に語りかける際に用いられる空間で、父系の親族集団ごとにそのリーダー(司祭)にあたる男性の家屋敷のなかに設置されている。すなわち、その火をつけなおす儀礼をとおして、男性の死後、だれがその後継者であるかを視覚化し、周囲に知らしめることになる。

そうした儀礼のほかにも葬礼の過程で、あるいは墓参りの後に、遺された人びとの多く(とくに子どもたち)の通過儀礼が次々とおこなわれていく。幼い子どもたちから成人を迎えるくらいの男女まで、さまざまな年齢の人びとが儀礼にあずかるが、それらは一般には墓参りの後に家屋敷や父系の親族集団ごとに一斉におこなわれる。また、そうした通過儀礼の一部は葬礼の際にもおこなわれる。以下では、ある集団の墓参りのようすを概観し、その後におこなわれた子どもたちの通過儀

礼をみていく。

ヒンバの人びとは、父系リネージのつながりを中心とした集団ごとに、墓参り（「オクヤンベラ」[okuyambera]）をおこなう。墓参りは、葬礼の翌年などに喪明けの儀礼としておこなわれ、その後は2～3年に一度のわりあいで実施される。大体5～7月ごろ、遅くとも9月はじめごろまでのあいだにおこなわれることが多い。これはちょうど雨季が終わったころにあたり、大きな旱魃の年でなければ水場の流量も回復して、カオコランドの大地が一面、緑の草でおおわれるような季節にあたる。そうして草が十分に生育した環境のもとであれば、家畜たちは十分に成長し、また人にも十分なミルクを提供することができる。

人びとは乾季のあいだは三々五々に散らばって小さな家畜キャンプを築き、点々と遊動してくらしているが、雨季に入ると徐々に家屋敷に戻ってくる。そうして分散していた人びとが集まり、どの世帯も家屋敷やその近くまで家畜を連れて帰ってきたところに、墓参りがおこなわれるのである。ここでは、カオコランド中部にくらすヒンバを中心とした親族集団（ある父系リネージ集団）の墓参りのようすを示す。

この集団の祖先の墓は、彼らのリーダーがくらす村や、そこからさらに離れたいくつかの地域に点在していた。いちばん近いところでは、リーダーの家屋敷から川沿いに3キロメートルほど下った林のなかに墓地があり、そこには新旧の墓がたくさん並んでいた。人びとはこの墓の近くの川辺に集まって墓参りをおこない、その数は総勢100人あまりにのぼった。

彼らは、まず墓から少し離れた川辺に仮住まいの小屋や家畜囲いを手早くつくり、そして、オクルウォをつくった。先述したように、一般にオクルウォは父系リネージ集団のリーダー（司祭）にあたる男性の家屋敷のなかにあるが、このように家屋敷から離れた場所で墓参りをおこなう際には、そこに一時的にオクルウォをつくり、儀礼をすすめる。

オクルウォの構造をみると、まず地面に平たい石がいくつか並べられており、その西側にはモパネ（*Colophospermum mopane*：マメ科ジャケツイバラ亜科の半落葉樹）の枝木が積み重ねられている。儀礼のとき、司祭にあたる男性はこの平たい石のところに座って祖先に語りかける（写真7）。もちろん、墓参りのときだけではなく、たとえば子どもの名づけの儀礼や男女の結婚のときなどに、さらには家畜の去勢などをおこなう際にも、リーダー（司祭）はオクルウォで祖先に語りかけて祈り、平安を願う。そうした儀礼において人びとは、ウシなどの家畜を屠るごとに、新たなモパネの大きな枝木を切ってきては、ひとつまたひとつと、オクルウォの上に積み重ねていく。

墓参りの際には、まず司祭である集団のリーダーとともに年長の男性たちがオクルウォの前に集まって、これから墓参りの儀礼をはじめたことを祖先に告げた。次いで、主だった既婚男性たちがす



写真7 オクルウォー家屋敷のなかにつくられたもの
リーダー（司祭：写真左の男性）は、オクルウォで祖先に語りかけて祈り、平安を願う。

べて集まったことを確認してから、ヒツジを屠った。これは、そうした既婚の男性たちだけが食べることができる、父系リネージ集団にとって特別なヒツジである。この既婚男性たちは、その後、墓参りにおいて重要な役割を果たす。

さて、先述したように、彼らの家族や祖先たちの墓はカオコランドの各所に点在していた。それらのうちの主なものは、墓参りをおこなっている川辺の墓地とそこから十数キロメートルから数十キロメートルほどの離れた場所にあり、人びとはそうした複数の墓に参ることを習慣としていた。ただし、川辺の墓地を除けば、大半の墓は車で移動しなければならないような遠く離れた場所にあり、そうした墓に、100 人あまりの参列者全員が一緒に出向くことは難しかった。したがって、近年、彼らはそれぞれの墓に数人ずつの使者を送ることにしていた。使者は、先ほどヒツジの肉を食した者たちのなかから選ばれ、いずれも 30 代から 50 代くらいの既婚男性であった。彼らは 3~4 人ずつのグループにわかれて、グループごとにそれぞれ数カ所ずつ遠方の墓に参った。筆者もそうしたグループのひとつと一緒に墓参りにでかけた。

そのグループは、まず川辺から 60 キロメートルあまり離れた場所へと車で移動した。道端に車を置いた後は、林のなかをさらに歩いて進んで、辺りに点在する墓をたずねて歩いた。墓は林のなかにあり、そこには看板や目印になるものはなさそうにみえる。そして、男性たちがそれらの墓を訪れる機会は 2~3 年に一度のこうした墓参りのときだけであるが、それでも彼らは、どこに誰の墓があるかということをよく知っており、迷うことなく墓参りをつづけていった。そして、木に寄り添うように横たわる墓を見つけるたびに、彼らは、墓のうえや周囲に散らかった枯れ葉や枝などを取り除き、草をむしってきれいにした後に、近くのモパネの木から若葉のついた小さな枝木を手折ってきて、それを墓のうえにおいた。また、墓の頭の部分に据えられた大きな平たい石には、持参したバター（「オマゼ」〔omaze〕）を塗りこめた。

このようにして男性たちは、グループごとにそれぞれが各地に点在する墓をたずねて歩いた。そうして 2~3 日が経ち、各グループが川辺の墓地へと戻ってくるたびに、集団のリーダーである男性はオクルウォの前にすわり、それぞれが各所での墓参りを終えたことを祖先に語りかけ、報告した。

そうして遠くに派遣されていた既婚男性のグループがすべて戻ってくると、ようやく墓参りのためのウシ（祖先に捧げるウシ）が屠られた。このウシの肉は、性別や年齢を問わずに墓参りに集まったすべての人びとに分け与えられ、その場で食された。ウシ一頭分の肉も脂も、骨の髄も、100 人あまりの参列者によってあっというまに消費されていった。このようにして、人びとは一頭また一頭と、次々にウシを屠っていった。そして、ウシを屠るたびに、男性たちは近くのモパネの木を枝ごと大きく刈って、それをオクルウォのうえに重ねていき、そこでリーダーが祖先に語



写真8 オクルウォー墓参りのときにつくられたもの
男性たちは牛を屠るたびに、モパネの木枝を刈って、オクルウォのうえに重ねていく。

りかけ、祈った（写真8）。

屠ったウシの解体作業は、未婚あるいは結婚してまもないような若い男性たちにまかされている。彼らは、実に手際よくウシの皮をはいでいき、骨つきの肉を切り分けていく。また、その過程であらわになったウシの内容物（胃や腸など）を用いて、年長の男性たちが占いをおこなう。

この占いは、墓参りのときだけではなく、ほかの儀礼でウシを屠ったときにもおこなわれるものである。そうした占いは、ケニアやウガンダなど東アフリカにくらす牧畜民（ヒンバのようなバントゥ系の牧畜民ではなく、ナイロート系など異なるの言語群に属する牧畜民）のあいだでもおこなわれており、一般に「腸占い」と呼ばれている。ヒンバの人びともまた、ヘレロ語でこれを「オウラ」（*oura*）：直訳すると「腸」の意であるが、ここでは“ウシの胃腸などをみて占う行為”＝「腸占い」を指す）と呼んでいる。

このオウラ（腸占い）において、ヒンバの人びとはウシの皮をはいだ後、腹側を割いて内容物を取りだすと、まず胃や腸管膜を広げてそれらの表面をみて占う。そして、腸をひっぱりだして胃のうえにのせて広げ、それらをみながらさらに占いをすすめていく。このとき人びとは、ウシの胃腸の表面に走っている血管の赤黒い線の太さや濃淡、血管に入った空気や部分的にみえる血液の塊り、シミ状に広がった血液のようすなどに目を配る。さらには、胃腸の膜をとおして透けてみえる内容物（ウシが食べた草などが消化されたもの）の色の濃淡や腸間膜などの状態をみて、彼らは、近い将来に何が起ころのか、あるいは過去の出来事の原因（たとえば、人が亡くなった理由など）を知ろうと試みる（写真9）。

墓参りでは多くのウシが屠られ、そのたびに男性たちはウシの内容物を目の前にして、そこからなにかを読みとろうと真剣であった。人びとはそれぞれに考えを述べて、互いの意見を参照しながら占いをすすめていった。なかには腸占いを得意とする（よく当たるとされる）者もあり、その男



写真9 「オウラ」(腸占い)

ウシの胃腸や脂肪膜などの内容物を広げて、それらをみて、指し示しながら、男性たちは占う。

性が語る内容に、人びとは熱心に耳をかたむけていた。ある日の占いでは、「オプラの町から北に100キロメートルほど走ったところの道路で、車の事故が起こる」、「このウシのもち主の家屋敷で、年長の男性が亡くなる」という話がでた。たとえば前者の場合、人びとはウシの内容物を地図にみたてて、そのうえに走る血管の筋を道にあてはめるなどして、占いを進めていた。

このようにして祖先に捧げられたウシが次々に屠られていき、やがて墓参りはクライマックスを迎えた。最後は、老若男女100人あまりの人びとと一緒に川辺の墓群へと歩いていき、全員で墓に参った。人びとは列を組んでゆっくりと墓に近づいていった。

墓を前にして、男性たちは周囲の草をむしり、墓のうえに散らばった枯れ葉や枝を取り除き、崩れかけた墓石や散らばった石があればそれらを手にとって置きなおして、墓を整えた。そして、それぞれの墓にモバネの若木の枝葉を置き、さらに墓の頭の部分にあたる墓石や墓碑にバターやミルク（酸乳）を塗りこめて、それぞれの墓の主である祖先に語りかけていった。こうした手順は、ミルクの塗布の有無を除けば、男性のグループが遠方の墓を参った際にみられた手順とほぼ同じであった。

男たちがそうした作業をつづける一方で、女たちは近くの地面に腰をおろして、声をふるわせながらすすり泣きつつ、低い声で祖先の唄「オミタンドゥ」〔*omitandu*〕をうたっていた（写真10）。こうした女たちの姿は、2章でみた埋葬のときのようすによく似ている。

埋葬でも墓参りでも、墓を前にしたときに彼らがとるべきふるまいの様式は、性別ごとに慣習としてある程度、決まっているようであった。また、その際、人びとは何頭かの未経産ウシを墓前に連れていく。それらのウシは墓に埋葬された故人に与えられるもので、これ以降、そのウシは「祖先のウシ」となる。後に、そのウシが出産してミルクがでるようになると、そのミルクからつくられた酸乳やバターもまた特別なものとなり、人びとに食されるほか、さまざまな儀礼の際に用いられる。

そうして大勢の人びとは30分あまりのあいだ、墓の前で過ごした。その後、彼らが墓群から離れてもとの場所に戻ると、まず主だった年長の男性たちがオクルウォに集まって、墓からもち帰ったモバネの葉をちぎって平たい皿のうえにおき、そこに水を加えた。そして、この水をそれぞれが口にくんでは吐き出すという動作をいく度くり返した。年長の男性たちがそれらの動作を終えると、ついで、ほかの成人の男女や子どもたちもまた、ひとりずつこの水を手にとっては、その手でそれぞれの口や額に触れた。そうして各々の参列者が必要な過程を終えると、女たちはふたたび小屋や木陰に戻り、男たちはオクルウォの近くに留まりウシやヒツジを屠りはじめた。

このようにして、さらに複数のウシやヒツジが屠られ、それらの肉がすべて食べつくされるころ、墓参りはようやく終焉を迎える。そして、二週間あまりのあいだ、川辺で一緒に寝起きしていた大勢の人びとはそれぞれの家屋敷へと戻っていった。

墓参りは、集団の規模によって訪れる墓群の数や日数などに多少の違いはあるものの、一般にはこのような内容でおこなわれている。とりわけ葬礼の後にはじめておこなわれる墓参りは、喪明けの儀礼でもある。遺族たちは、家族の死後しばらくのあいだ、喪に服していることを示すべく取り外し、あるいはかたちを変えていた装身具や、成人男性は髪型などを元に戻す。また、亡くなったのが既婚男性であった場合や、とりわけ年長の男性で集団のリーダー（司祭）や村のヘッドマンなど信仰や政治の面において重要な役割を担っていた場合には、そうした社会的な地位・役割をだれ



写真10 墓参りのようす

上：川辺の墓地にて。男たちは一つひとつの墓に参り、その頭の部分にモバナの枝葉を置いて、バターやミルクを塗りこめる。その後ろで女たちは頭を抱えてすすり泣く。

左下：遠く離れたところにある墓には、既婚男性たちが派遣される。彼らは各地の疎開林のなかに点在する墓を一つずつ訪ね歩き、墓周辺の草などを取り除いてきれいにしつつ、祖先に語りかける。

右下：墓の頭の部分にはモバナの葉を置き、バターを塗りつつ祖先に話しかけ、祈る。

が継承するのか、亡くなった男性の妻子や家畜を含めた“家屋敷”をだれが相続するのか（実際には、その家畜をどのように運用し、遺された妻子をどこに住まわせて世話していくのか）といったことを、集まった人びとで話しあう。ヒンバの場合、一般に家屋敷など主な財産は母系で（母方オジからオイへと）相続されることが多く、またヘッドマンの地位や、地域によっては、戦いのための道具や一部の家畜などは父系で（父から息子へと）相続される慣習がある。しかしながら、実際には、こうした墓参りを含めた話しあいの場で調整がなされて、一般的な慣習や規範からはやや外れた系譜的なつながりのなかで相続がなされた事例もあった。

そして、墓参りを終えた後に、人びとはそれぞれの家屋敷に戻り、そこでさまざまな儀礼をおこなう。儀礼のほとんどは通過儀礼とみなされるものである。出産と子どもの名づけ、初潮、結婚や

葬礼などは適宜おこなわれるが、それらを除くさまざまな通過儀礼の多くは、墓参り後のこの機会に一斉に実施される。

男児の割礼

生後数ヵ月から4～5歳くらいまでの幼い男児を対象として、割礼がおこなわれる。個人や家屋敷ごとではなく、親族集団（父系リネージ集団）ごとに該当する男児を集めて、その集団のリーダー（司祭）である男性の家屋敷の近くで一斉におこなわれる。

「オクリャモチョト」〔*okuryamotjoto*：男性の成人儀礼〕

「オクリャモチョト」とは、ヘレロ語で直訳すると、「『オチョト』〔*otjoto*：儀礼のための棚〕で食べる」との意である。これは男性の最初の結婚式であり、その儀礼を経てはじめて彼は青年から成人男性へとライフ・ステージを変えることになる。しかしながら、現在では後者の“成人”という意味あいだけをのこして、前者の“結婚”については、擬似的なかたちをとることが多い。



写真11 「オクリャモチョト」のようす

すなわち、該当する年ごろの20代～30歳前後の青年たちは、幼い少女を妻にみたてて擬似的な結婚式を執りおこない、その間、しばらくのあいだは家屋敷のなかに設置された「オチョト」で寝起きし、食事を取り、同世代の既婚／未婚の男たち（かつて幼いころに、同時期に割礼を受けたであろう者たち）とともに“結婚”を祝う（写真11）。儀礼の際、当該の青年たちはオクルウォで司祭から布を与えられて、それを頭に巻く。そして、この儀礼を経て、男性は成人の髪型を結うことができるようになる（写真9、10などを参照）。

年長の人びとのなかには、かつて幼い少女を連れて、彼女との実際の結婚式としてこの儀礼を執りおこなっていた事例もあった。その際、儀礼の後、少女はいったん親元に戻って過ごし、成長した後に、男性のもとに居を移して実際の結婚生活をはじめていた。

髪型や装飾品、衣装を変える儀礼

このように男性は成人儀礼をおこなうまでに、また、女性ならば初潮や出産、結婚などを迎えるまでのあいだに、ヒンバの子どもたちは男女とも節目ごとに何度かにわたって装いを変えていく。それぞれの世代に応じて、髪型や首飾り、腰のベルト飾り、足飾り、ときには皮のエプロンのかたちなどをも含めて、身につけるものを変えていく。

たとえば少女は、幼いころには一部の髪以外をすべて剃りあげて、ほとんど坊主頭のような髪型をしている。やがて、5～6歳から遅くとも7歳くらいになると最初の大きな衣装がえの儀礼をおこなう。このとき、首もとのビーズ飾りのかたちを変えると同時に、額から頭頂部にかけて髪を伸

ばしはじめて、今度はそれで太い三つ編みを2本ないし4本…というように編んで、額の両側や後頭部へと伸ばすようになる。⁽⁶⁾その後、少女たちはいく度かの儀礼を経て装いを変えていき、やがて10代半ばごろになると、成人女性と同じように髪を小分けにしてたくさんの長い縄編みをつくり、それをすだれ状に肩に垂らしたような髪型となる（写真12、写真13）。

そうして髪型を変えるたびに、身につける装身具も少しずつ変わっていく。また、同じ髪型であっても、初潮、出産などを経て年を重ねるごとに身につける装身具を変えたり、装身具に用いるビーズの数を増減したりする（たとえば、ビーズを足して首飾りを太くするなど）。したがって、同じすだれ状の髪型（成人女性と同じ髪型）をしていても、初潮の前か後か、経産か未経産かによって、身につけることができる装身具や衣類のかたちも異なってくる。

子どもの名づけの儀礼などは、出産の後に適宜、おこなわれるが、もしもそれが墓参りのタイミングにあえば、ほかの通過儀礼と一緒におこなわれることもある。また、カオコランド中部の村にクラス親族集団の事例では、生まれた子どもが双子であったために、さらに多くの人びとを集めて盛大に双子のための儀礼が執りおこなわれた（写真14）。

こうして、子どもたちがさまざまな儀礼をおこない、髪型や身につけるものを変えるごとに、親やオバたちは子どもたちのために必要な装身具の材料を準備し、ヒツジやウシを屠る。



写真12 髪型を変えるにあたって、儀礼で屠ったヒツジの脂肪膜を少女たちは頭にかぶって、オクルウオで祖先に祈る。



写真13 少女たちの髪型
左側の少女は、太い三つ編み4本を前後に垂らしている。一方、右側の少女は、そうした太い三つ編みから、成人女性と同じ髪型へと変えたばかりである



写真14 双子の儀礼に集まった人びと

⑤……………考察—生きる者の日常と、墓

これまで1～4章では、生きている者と墓のかかわりという観点から、ヒンバの墓について、遺体の埋葬場所の選択および実際の埋葬（式）ようすや、墓参りとそれに連動しておこなわれる通過儀礼などに着目して、事例をあげて論じてきた。それらをもとに、この章ではいくつかの事例について補足しながら、生きる者と墓のかかわりについて考察を加えたい。

葬礼、墓参りと通過儀礼

モーリス・ブロックとジョナサン・パリーは、成員の死がその社会にとっての危機であるがゆえに、死をめぐる儀礼が社会の再生産に関与していると論じている[Bloch&Parry1982]。田中は、この箇所を引用して、死（弔い）は同時に再生産（祝い）の機会でもあり、そこでは個別的な死が社会の活性化に変容する過程が強調されることを述べている[田中2004]。

ヒンバの場合には、葬礼だけではなく、2～3年に一度おこなわれる墓参りが大きな契機になっていた。墓参りは、亡くなった人びとの「オチルル」[otjiruru：霊、魂の意]の平安を祈る機会であると同時に、生きる者たちの日常にとっても重要な意味をもつ。そこでは、結婚のアレンジや相続について、さらには日常の問題ごとについて話しあうといったように、生きている者たちが彼らの^{せい}生にとって重要なものごとを調整し、確認して合意を得ていく場にもなっている。そして、墓参りと連動しておこなわれる通過儀礼において、子どもたちは髪型や衣類・装身具などを変えることによって、目にみえるかたちで成長を表現する。このようにさまざまな通過儀礼を通して、生きている者たちはそれぞれ次のライフ・ステージへと進んでいく。それらは個人の成長を、ひいては集団の改変・成長を可視化する舞台であり、墓参りはそうした機会を定期的にもたらす契機となっている。

また、葬礼の後、最初におこなわれる墓参りでは、遺族たちは喪に服すべく変えていた装身具や髪型を元に戻すことによって、喪が明けたことを示す。それは、周囲の他者に対してだけではなく、親族を亡くした悲しみ（涙）から次のステージへと移り、新たな生活をはじめることを、遺族自身にも明示化する機会になっていると筆者は考える。こうしたヒンバの悲しみの経過・受容と涙の意味については、かつて別稿[吉村2001]で触れたことがあるが、さらに今後は新たな資料を加えて別途、考察をすすめたいと考えている。

墓・墓地に対する畏れの有無

ナミビアで調査をはじめるとあって、筆者は、1994年に太田至氏のご指導のもとにカオコランド全域をまわり、各地のヘレロやヒンバの村を訪ねて歩く広域調査をおこなった。当時はまだヘレロ語を話せず、道もよくわからなかったため、わたしたちはオブヲの町に暮らすヘレロの青年を通訳として雇い、彼に同行してもらうことにした。

広域調査では、車でカオコランドのさまざまな道を走りつつ、ヘレロやヒンバの各地の村や家屋敷をたずねてまわった。もちろん、ときには車を降りてしばらく林のなかを歩くこともあり、その際、林のなかでヒンバの墓に出会うこともあった。そのひとつに、小石をたくさん積みあげたよう

なやや古い様式の墓群があったが、それらの墓に出会ったとき、通訳のヘレロ青年の様子が変わった。彼は、「墓に近づいてはいけない」とわたしたちにいった。彼の話のを要約すると、彼らは普段、墓に近づかないし、そもそも墓には近づくべきではないということであった。その言葉には、墓に近づくのはとても怖いことであるというつよい警告のニュアンスが感じられたし、何よりも、そのヘレロの青年自身が墓に近づくことをとても畏れていた。

このような経験から、翌年以降、ひとりでヒンバの村に住みこんで調査をはじめた後もしばらくのあいだは、筆者はそのような“ヘレロやヒンバの慣習・規範”(…だと、そのときの筆者が理解していたもの)をできるだけ守ろうとしていた。そして、ときおり葬礼や墓参りに参列させてもらいつつ、それ以外のときは、わたしたち生きている者は墓に近づくべきではないのだらうと思っていた。

しかしながら、その後、カオコランドで長く生活していくうちに、実はそうした墓に対する姿勢(思い込み)は、必ずしもヘレロやヒンバ一般に広くみられるものではないということに、筆者は気づいた。たとえば、放牧や薪拾いのために林のなかを散策しているときや他の村に出かけたときなどに、偶然、墓に出会うことがあった。そうして墓に出会ったとき、一緒に歩いていたヒンバの人びとは、牧童の少年少女も成人した男女も、とくに墓を畏れているようにはみえなかった。なかには、「これは、〇〇のおじいさんのお墓でね、その向こうの墓は…」というように、その場で目の前の墓について話をきかせてくれた人もいたし、そうした墓群のそばの木陰に腰をおろして、休憩したこともあった。

このような日常における経験とともに、ヒンバの埋葬および葬礼に参列する機会を重ねていくなかで、筆者にとってより印象的だったのは、“墓を畏れる”ということが“呪い”と結びつけられて語られる場面であった。たとえば、2章でみたように、棺をまさに地中に納めようとする直前に、男たちによって担がれた棺は参列者たちのもとへと突進し、人びとの輪から輪へと、いくつもの輪に沿って参列者のあいだを走りまわっていた。村にくらすヘレロやヒンバの人びとは、それを、“棺(のなかの死者)がみんなにあいさつしている”行為とみなし、“もしも死者を呪った者がそこにいたならば、棺が動いてその者を指し示す”と考えている。

筆者自身は、実際に“棺がカタカタと音をたてて動く”場面に遭遇したことは一度もない。しかし、1997年にカオコランド中部でヒンバの年長男性が亡くなったときに、その親族たちが男性の死について折々に語っていた“呪い”の話を、くり返し耳にした。そうした語りのなかで墓(棺の埋葬)に関連する部分を要約すると、「A(ヒンバの年長男性)の棺を埋葬するときに、Bはどこかに行ってしまう帰ってこなかった。埋葬が終わると、彼はようやく戻ってきた」というものであり、そのことが、「BがAを呪い殺した」と人びとが解釈する理由のひとつとしてあげられていた。すなわち、彼らの説明によれば、埋葬時にAの棺がBの近くで動いてしまうことを、Bは畏れていたから、Bは埋葬の場にいらなかったというのである。⁽⁷⁾

もちろん、棺(遺体)が地中におさめられる前と、すでに埋葬されて墓がつくられた後とでは、その物質としての状態や様式も、それに対する人びとの社会的・心理的な解釈も、若干、変わってくることもあるだろう。それでも筆者がカオコランドにくらし、さまざまなヒンバやヘレロの人びとと出会うなかで、彼らが墓をことさら畏れている様子を見聞きすることは、先の通訳のヘレロの青年を除けば、ほぼなかったといつてよい。⁽⁸⁾林のなかにある墓についてはもちろんのこと、家屋敷

のなかに築かれた墓の側でくらしていたときも、その家屋敷にくらすヒンバやわたしはもちろんのこと、他村のヘレロやヒンバたちも、誰も墓を畏れるそぶりをみせることはなかった。

墓やそこに埋葬された死者との関連で、人びとがなぜ墓を畏れないのか、ではいったい何を畏れるのかを考察すると、次のような解釈がみえてくる。

林や川辺にある墓にせよ、家屋敷のなかにある墓にせよ、それが“本来あるべきところに、ある”墓ならば、ヒンバの人びとはそれらを畏れるそぶりをみせることはない。⁽⁹⁾一方、そうではない現象が起こった場合、すなわち、“本来そこにあるべきではないものが、ある”ことを、人びとはつよく畏れて警戒することがあった。

たとえば葬礼をおこなっていたときに、あるいはそれが一段落した後に、家屋敷のなかにたくさんハチが飛んできたり、あるいはヘビが小屋に入ってきたりといった現象がみられたことがあった。そうしたときの人びとの畏れは、わたしたちが一般に、「ハチ／ヘビを怖い」と思うような類のものとはやや趣を異にしていた。もちろんヒンバたちは、猛毒のヘビの危険性を経験的によく知っていたが、実際にヘビを目にしたときにはそれを必要以上に怖がるようなそぶりはみせず、比較的、冷静に対処していた。ハチについても、ときおり幼い子どもがはしゃいで逃げまわることであっても、多くの人びとは冷静であった。では、彼らはハチやヘビの何を畏れていたのだろうか。

ハチやヘビは、本来は野山や林のなかといった「モクティ」〔*mokuti*〕にいるはずのものである。それが家屋敷「オンガンダ」に入ってくるという、“本来あるべき状態とは異なる事象”に出会ったときに、人びとはそうした異常な事態を、故人の死の原因（呪い）や、それを伝えようとする死者の意志のあらわれと結びつけて解釈し、語っていた。すなわち、この場合に人びとが畏れていたのは、ハチやヘビが家屋敷に侵入したという事象そのものではなく、そこに表現された（と人びとが考える）、呪いについての死者からの訴えであった。

ヒンバにとって、墓は畏れるようなものではない。そして、仮に墓がどのような場所にあったとしても、そこに墓があるべき意味づけ・位置づけがなされうるのであれば、人びとは墓を畏れはしない。それどころか、そうした墓をとおして故人のみならず生きている者もまた、明確なメッセージを表現しようとする。

一般に、多くの墓は家屋敷から少し離れた林や川辺にあることを、これまでくり返し述べてきたが、ここでは、そうしたスタンダードからはやや外れたいくつかの事例をもとに、そうした埋葬場所を選んだ人びとの意図とそれらの墓の意味づけについて、考えてみたい。

特殊な場所に埋葬されるということー土地や権力との結びつきから

家屋敷のなかの墓

家屋敷のなかに築かれた墓については、別稿〔吉村 2004〕で詳しく論じているので、ここではその内容をかいつまんで説明するにとどめたい。一般に、家屋敷の主であるヒンバの男性が亡くなった場合、彼の死後その家屋敷はとき放たれて、遺された人びとは別の場所に新たな家屋敷を築いてくらす。ところが、主であった男性が家屋敷のなかに埋葬された場合には、その妻や未婚の子どもたちは故人の家屋敷に留まって住みつづけることになり、さらには他所にくらしていた故人の既婚

の息子たちもまた、家族を連れてそこに移住し、寡婦たちとともにくらしはじめることがある。このようにして、家屋敷は亡き主の墓とともに維持されて、次の世代へと引き継がれて規模を拡大させていく。

そうした家屋敷の成員の再編成と拡大は、新たに一緒にくらしはじめた成員間の関係をより密にすると同時に、その家屋敷の周辺の自然資源（とくに放牧地や水場の利用）をめぐる村で起こる諸問題への対処において、その集団（家屋敷の成員）の影響力や政治的な力を強めて、支えうる要因になる。すなわち、「自分が死んだならば、その遺体を家屋敷内に埋葬するように」と、男性が生前に指定する行為は、家屋敷や周囲の風景（やそこに含まれている自然資源）に対する彼の愛着を示すとともに、そうした愛着あるものを次の世代へと確実にひき継ぐ手がかりになると考えられる。

オブヲ郊外の墓

次に、家屋敷や村から遠く離れたオブヲの町に、墓が築かれたふたつの事例について、詳細を補足しつつ、考察を加えたい。

1997年にオブヲに埋葬されたヒンバの事例において、その墓碑の手配や移送・設置を、首都ウィントフックのNMC（National Monuments Council）に勤めるヘレロの男性が手伝ったエピソードを、3章に書いた。今日もヘレロとヒンバは、かつて彼らがひとつの集団であったことを認識している。実際には、都会にくらすヘレロの役人とカオコランドの村にくらすヒンバとは、その装いも家屋敷や持ち物もずいぶんと異なる。しかし、両者は同じ言語を話し、文化的・社会的な規範や慣習の多くを今も共有している。したがって、都会に住むヘレロもまた年下の者として、カオコランドにくらすヒンバの年長男性を敬い、それにふさわしい行動をとろうとする。そうした彼らの慣習や規範に沿って、NMCのヘレロ男性は、カオコランドから来たヒンバの男性の考えを尊重し、墓の設置を手伝ったと理解することができるだろう。

そして、そのヘレロの男性が当時、まさに“国の遺跡・遺物”（National Monuments）を管理・



写真15 ナミビア中部にある、ヘレロの墓

左：石を積みあげただけのものもあれば、後年、墓碑を設置したものもある。
右：墓の土台にはアフリカ大陸が描かれており、弾丸のかたちをした墓碑には、故人の氏名などの他に、銃の絵が描かれている。

管轄する組織の長であったという点は、とても興味深い。そこには、公式にせよ非公式にせよ、“墓の設置に、NMC（のヘレロ男性）が関わった”という事実があり、その後の人びとの行為と解釈によっては、このヒンバの墓は、故人の親族や彼らがくらす村といったような小規模な集団や土地（地域）のなかにとどまらずに、カオコランド全域やナミビアという国のなかに位置づけられる可能性をも秘めているからである。

オプヲには行政府がおかれているほか、病院や小中学校や高校、教会やガソリンスタンド、ホールセール・ストア、小さな店が並んだ市場など、当時からさまざまな施設があり、その町はカオコランドの中心となっている。

村にくらすヘレロやヒンバの人びとは、ふだんは村やさらに小さく細分化された地域や家屋敷ごとに活動し、さまざまな問題について話しあい、対処しつつくらししている。ひとつの村のなかで、あるいは村と村のあいだで起こる資源利用のトラブルや政治的な問題も、彼らはまず村で自治的に解決しようとする。しかし、当事者間や村のレベルではどうしても解決できない場合、人びとは他の村のヘッドマンや有識者たち、あるいはオプヲの行政府に助力を求める。また、カオコランド全域で議論しなければならないような大きな問題が生じた場合は、各村からヘッドマンや成人男性たちが話しあいをおこなうべく、オプヲの町に集まる。

このようにオプヲの町は、地域を管轄する行政府にとってだけではなく、村にくらすヘレロやヒンバにとっても、経済や自治・政治などの面において重要な拠点となっている。そうした町に村のヒンバやヘレロの遺体を埋葬し、墓を築くということは、墓を通してその場所（オプヲ）に対する故人の結びつきをつくりだし、視覚化することになる。さらには、オプヲをとおしてカオコランド全域における故人（やその親族たち）の社会的な位置づけや政治的な力を示すことにもつながりうる。実際に、そうした墓にどのような意味づけがなされていくかについては、オプヲに築かれたヘレロ男性の墓の事例からもみてとることができる。

1997年にオプヲに埋葬されたヘレロ男性の墓は、かつてカオコランドのチーフであった男性の墓の側に、設けられた。そのチーフとは、20世紀はじめごろにカオコランドにくらしていたヘレロの男性であり、ヴィタ・トム（Vita Tom）という人物である。

1923年、当時の南アフリカ政府はカオコランド（当時の「カオコフェルト居住地：Kaokoveld Reserve」）において、三人のヘレロやヒンバのチーフを柱として、ヘレロおよびヒンバという集団の土地に対する権利を確認した。このとき、指名された三人のチーフのひとりが、ヴィタ・トムであった。彼は、19世紀末～20世紀はじめにかけてアンゴラ南部で他の言語集団を襲撃し、家畜の略奪などをおこなった後、1916～17年ごろにカオコランドに戻ってきた。そして、1937年ごろまでカオコランドでくらししていたとされる [van Warmelo 1962]。

1927年のセンサスによれば、ヴィタ・トムの管轄下には829人が、ほかのふたりのチーフのもとにはそれぞれ426人、378人がいたとされる。その一方で三人のチーフとつながりのない人びとも1549人いた。なお、この数字には、カオコランド南部にくらしていた約1200人のヘレロは含まれていない [Bollig 1997]。

ヴィタ・トムの名の「ヴィタ」(Vita)とは、ヘレロ語の「オヴィタ」[ovita]に由来すると考えられる。それは、「戦い、戦争」の意であり、まさにヴィタ・トムはアンゴラでもカオコランド

に戻った後でさえも、その名のとおりに“戦う人”であった。彼がカオコランドで家畜を略奪しようとヒンバの家屋敷を襲撃していたことは、当時の行政資料にも記されている（NAN SWAA : A552Kaokoveld）。また、彼は別名オルログ（Oorlog）あるいはハルンガ（Harunga）とも呼ばれていた。

彼を含めた三人が南アフリカ政府によって最初にカオコランドのチーフとして任命された後、そうした政府の任命による各地域の政治的なリーダー（ヘッドマン）の数は徐々に増えていった。1947年から48年にかけて同地で調査をおこなったファン・ヴァルメロの報告書には、13人のヘッドマンの名が記されている〔van Walmelo 1962〕。後に、筆者が調査地において確認したところ、そのうちの一人は、先にあげた三人のチーフのうちの一人の系譜をひく男性であり、彼の助言をもとに残りの12人のヘッドマンが選出されたという話であった。その12人のなかには、ヴィタ・トムの系譜をひく者たちもいれば、それ以外のチーフの系譜をひく者も含まれている。1968年～70年ごろにかけて調査をおこなったマランの論文には26人のヘッドマンの名が記されており〔Malan 1974〕、1990年代の独立後も、34人のヘッドマンと一人のチーフがいた〔吉村 2008〕。

こうした状況下で、今日、人びとはかつての三人のチーフとの系譜的および政治的なつながりや戦いの歴史などについて、祖先から語り継いできたこと、また彼ら自身が経験したことを語る。

ヴィタ・トムは、1916～17年ごろから1937年までカオコランドでくらしていたが、同年ごろ、カオコランドの東に隣接する、オヴァンボという他集団の居住域で亡くなった。その墓は今日、オブラにある。上述したように、彼はかつてカオコランドで最初に任命されたチーフ三人のうちの一人であった。そして、3章でみたように、1997年に亡くなったヘレロの男性はこのヴィタ・トムの直系の“第一継承者”ではなかったが、彼と系譜的な繋がりをもっていた。そうした男性の遺体をヴィタ・トムの墓の側に埋葬することは、まさに彼とヴィタ・トムの系譜的な繋がりをもつ、そこに並ぶふたつの墓によって他者に明示化することになる。

森山は、マダガスカルにくらすシハナカについて、彼らが自身の埋葬場所（墓）をどのように選択していくかを、埋葬様式の変化とそれとともに儀礼の変化などとともに示し、埋葬された人が抽象的な祖先ではなく個性をもった死者へと変化しつつあることを指摘した〔森山 1996〕。また、津城は、宗教と死者祭祀についての論考で、葬祭（葬礼）や祭祀の過程で死者のリアリティが失われて、生者が死者の記憶・表象を恣意的に資源化し、政治的にも利用する行為について論じている。その際、死者のリアリティが弱まるのに応じて、生者は死者を資源として操作しやすくなり、死者のリアリティが強まると、資源として恣意的には御しにくくなることを指摘している〔津城 2011〕。

ヘレロやヒンバの人びとは、自然環境や他の集団とのかかわりのなかで育んできた信仰（祖先崇拝を含んだ信仰）と慣習にもとづいて、死者を弔い、埋葬し、墓をつくっていた。このとき、埋葬場所の選択や墓碑のデザインなどによって死者の社会的な地位や力を誇示するという側面に目を向ければ、それは一見、死者をより際だった特別な“個”として、浮かびあがらせているようにもみえる。しかし、このときの“個”は、他から切り離された存在ではなく、あくまでもある土地や過去の人物（たとえば、歴史的に有名な過去の英雄や祖先など）がもつ社会的・歴史的な背景との関連のなかで表現され、位置づけられるものであり、その点こそが重要な意味をもつ。そして、遺された／生きている者たちもまた、新たな墓に社会的・政治的な意味を付与していくという行為を

とおして、土地とのつながりを強化し、さらには彼らと過去の祖先たちとの繋がりを明示化して、生きている者たちの力をも強化していくことができる。

おわりに

本稿では、墓と生きる者の営みのかかわりについて考えてきた。そこには、上述の内容のほかにも、人びとが大切な人の死を受け入れていく過程や、親しい者の死を新たな世代の生きる者たちの成長へとつなげていこうという実践が含まれている。筆者の関心もまた、そこにあり、わたしたち人間が人の死をどのように受け入れて解釈し、そこに遺された／生きる者の生を紡いでいくかという点にある。そうした大きなテーマにおけるステップのひとつとして、本稿では、まず埋葬場所および墓という物質化／視覚化されたものと、そうした墓と生きる者たちとのかかわりを手がかりに、考察をすすめてきた。

今後は、上述の大きなテーマについて、さらに別の観点からも考察していきたいと考えている。たとえば、埋葬や墓参りの際にヒンバの女性たちが一斉に泣くという場面があった。こうしたヒンバの女性たちの涙を、いわゆる“泣き女”のような、ある種の形式化された行為とみなすこともできるだろう。しかし、少なくともヒンバの女性たちの泣くという行為は、それだけにとどまらないのではないかと筆者は考えている。ヒンバの女性たちが集団で泣く場面はほかにもあり、そうした事例をも参照しつつ、泣くという行為とその涙の内側にこもる彼女たちの知を理解し、さらに考察をすすめることも今後の課題としたい。

謝辞

本稿で用いた資料の多くは、講談社野間アジア・アフリカ奨学金留学生としてナミビアに滞在させていただいた際に、カオコランドでおこなった現地調査やウイントフックでおこなった資料調査で得たものである。また、そのほかに平成9年度科学研究費補助金「変容するアフリカ牧畜社会の問題解決にみる内在的論理の人類学的研究」（基盤研究（A）（2）・研究代表者：太田至）の研究協力者としても、調査の機会をいただいた。そして、首都ウイントフックやカオコランドなどでは、多くの方々にお世話になった。とりわけヒンバやヘレロの人びとには、さまざまなことを教えていただくとともに、日常生活のあらゆる場面でご助力いただいた。彼らの温かさや寛容さなくしては、ひとりで長期間カオコランドに滞在して調査を遂行することはできなかつただろうと思われる。心から感謝の意を表したい。

註

（1）——ここでいう村とは、それぞれ約20～30キロメートル四方の広がりをもつ領域を指す。各村にはヘッドマン1名とカウンセラー2名がおり、そうした村が、カオコランドには三十数ヵ所ほど点在していた。ただし、そうしたヘッドマンおよび村という領域は、近代以降の委

任統治の歴史のなかでつくりだされ、浮き彫りとなってきたものでもある。そうしたヘッドマンや村の創出の経緯と詳細については、別稿〔吉村 2004, 2008〕を参照されたい。

（2）——1910年に独立した南アフリカ連邦は、1961年

には英連邦から脱退して南アフリカ共和国となった。ナミビア（旧南西アフリカ）が委任統治を受けていた時代はこの両者の時期にまたがっているが、本稿では、「南アフリカ」という略称をこの両方にあてて記すことにし、1961年以前には前者を、以降は後者を指すものとする。

(3)——ナミビア北西部のヒンバとヘレロの居住域は、古くからカオコランドと呼ばれてきた。1990年の独立後、ナミビア政府は新たな行政区画を設定しなおしたために、現在、カオコランドのエリアはクネネ州オプワ県となっている。調査当時も、行政による報告書や地図では新しい行政区画名に変更されつつあったが、現地の人びとや観光客向けのガイドブックや地図はそのままカオコランドという名称を使いづけていた。そうした状況をふまえて、本稿では便宜上、ナミビア北西部のヒンバとヘレロの居住域にあたるこのエリアを、カオコランドという名称で呼ぶことにしたい。

(4)——1997年10月、このヘレロの男性の埋葬式がオプワでおこなわれた、ちょうどその日に、先のヒンバの男性の墓碑が首都ウィントフックから届き、同じオプワの町の郊外に設置された。

(5)——オクルウォは、父系リネージ集団のリーダー（司祭）を務める男性の家屋敷にある。それはリーダーである男性の第一夫人の小屋と家畜囲いのあいだに設置されており、その様式は、地面に平たい石がいくつか並べた後、そのすぐ西側（家畜囲いの側）にモパネの枝木を重ねて積みあげたものである。司祭にあたる男性は、この

平たい石のところに座って祖先に語りかける。人の出生からさまざまな成長と祝い、死に至るまでの儀礼において、あるいは雄ウシの去勢など家畜のためにおこなう儀礼においても、オクルウォは重要な場となる（写真7）。

(6)——そうした少女の頭の三つ編みの本数は、父系集団によって異なる。

(7)——このようなヒンバの死と呪い（呪術）について、その方法や解釈にはさまざまな側面がある。それらについては、いずれ別稿で論じたい。

(8)——通訳のヘレロ青年がなぜ、あれほどにも墓を畏れたのかという点については、定かではない。考えられる理由のひとつとしては、従来の祖先崇拜的な信仰とは異なる、キリスト教的な新たな世界観の受容・浸透の度合いが、オプワの町にくらす彼と村住みのヒンバとは異なっていたということが、あげられる。

(9)——家屋敷という人の居住空間のなかに墓があるということは、見方によっては、“本来あるべき姿”からは若干、外れているようにみえるかもしれない。しかし、そこに何らかの意図や意味づけがあり、それらを人びとが理解し、受容するならば、家屋敷のなかの墓もまた、やはり、“あるべきところに、ある”とみなすことができるだろう。なお、家屋敷のなかの墓にかかわる意図や意味づけなどについては、別稿〔吉村2004〕を参照されたい。

参考文献

- 太田至 1996 「ナミビア北西部のカオコランドに住むヘレロとヒンバのエスニック・バウンダリーの動態」『アフリカ研究』48：115-131.
- 太田至 2001 『われわれ』意識の乖離と重なり—ナミビアにおけるヒンバとヘレロの民族間関係』和田正平編著『現代アフリカの民族関係』明石書店：164-187.
- 田中雅一 2004 「祝う」関一敏・大塚和夫編『宗教人類学入門』弘文堂：125-135.
- 津城寛文 2001 『社会的宗教と他界的宗教のあいだ—見え隠れする死者』世界思想社.
- 森山工 1996 『墓を生きる人びと—マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京大学出版会
- 吉村郊子 2000-2001 「墓とともに生きる—ナミビア・カオコランドの牧畜民ヒンバの人びと— 1. 家囲いのなかの墓、2. 「泣く」作法、3. 墓参り」『SOGI』60, 61, 62 各号：77-80, 73-76, 73-76 各頁.
- 吉村郊子 2002 「二重単系社会における家囲いの継承と再編成—ナミビアの牧畜民ヒンバの事例から—」『動物考古学』18：77-103.
- 吉村郊子 2004 「土地と人をつなぐもの—ナミビアの牧畜民ヒンバにとっての墓」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民（ノマッド）—アフリカの原野に生きる』昭和堂：439-464.
- 吉村郊子 2008 「ナミビアの牧畜民ヒンバと土地のかかわり—その歴史と現在—」『国立歴史民俗博物館研究報告』145：229-251.
- Bloch, M.&Parry, J. 1982, *Introduction Death and the Regeneration of Life*. Cambridge University Press.
- Bollig, M. 1997a, Contested places : Graves and graveyard in Himba culture. *Anthropos* 92 : 35-50.

-
- Crandall, D. P. 1992, *The Ovahimba of Namibia : A study of dual descent and values*. Doctoral thesis in University of Oxford.
- Malan, J. S. 1973, Double descent among the Himba of South West Africa. *Chimbebasia* (B) 2-3: 81-112.
- Malan, J. S. 1974, The Herero-speaking peoples of Kaokoland. *Chimbebasia* (B) 2-4: 113-129.
- NAN SWA Administration A552 Kaokoveld (Storage Unit: 2516, File No.: A552/22, Name of file: Major Manning Report v2, 1917-24) . ナミビア公文書館蔵 .
- van Walmelo, N. J. 1962 (初版 1951), *Notes on the Kaokoveld (South West Africa) and its people*. The Government Printer. Pretoria.
- Vedder, H. 1966 (初版 1928), The Herero. In C.H.L.Hahn, H. Vedder and L. Fourie (eds.), *The Native Tribes of South West Africa*. Frank Cass & Co. Ltd., London. pp.153-211.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2013 年 3 月 25 日受付, 2013 年 7 月 30 日審査終了)

Graves and the Art of Living : a Case Study of the Himba, Pastoral People in Namibia

YOSHIMURA Satoko

There are various ways and customs on how to treat human bodies in death. Some are buried while others are not. Even in the case of burial, there are wide differences among areas and/or times in such as burial methods, rites, grave decorations and so on.

The Himba, southwestern bantu speaking people, live in Namibia and Angola. They are pastoral people and lead nomadic life, moving their herds from place to place. This article tries to highlight the relationships between graves and the practice of living people, with showing the case of the Himba in northwestern Namibia.

In their society there is burial custom and they have developed it with getting an influence from other groups. First this article shows their burial ways, choices of its location, grave decoration and these changes. In addition this study investigates and examines the practice of living people with concerning graves, focusing on the choices of burial location, their acts in funerals and visits to graves, and rites of passage associated with visits to graves.

The result indicates two points. Firstly, the choices of burial locations are significant not only to the dead but also to the living/bereaved; in some aspects burial locations indicate the social status and power of the deceased, and help living/bereaved families when they also express social/political power and assert their rights of accessing to natural resources. Secondary, funerals and visits on graves, which associated with various rites of passage for living/bereaved, are important opportunities of indicating and confirming the connection between the ancestors and living descendants. Through those practice and process, people try to accept the death of their beloved, to reconstruct their life, and to develop their art of living.

Keywords: graves, visits to graves, rites, the Himba, pastoral people